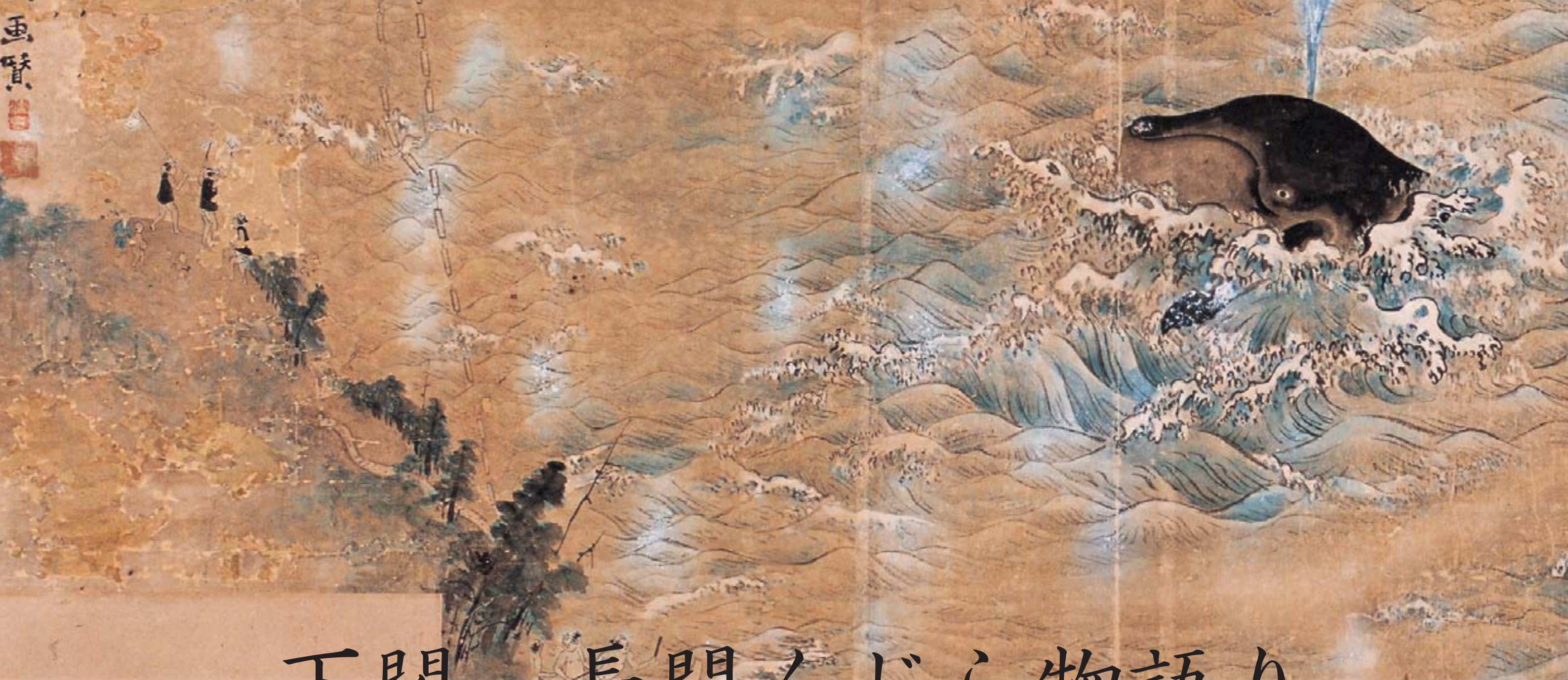
下関…長門

くじらマップ

下関・長門の捕鯨史がひとめでわかる
くじら便利マップ！

平成19年2月（2007）、「下関・長門鯨文化交流事業推進協議会」を創設。
両市がともに捕鯨と関わりが深いことから、鯨をキーワードにお互いに絆を強め、鯨文化への理解を深め、
まちづくりを発展させようとするものです。
協議会の事業の一環として、このくじらマップを作製しました。
まちづくりの手助けに使っていただけましたら幸いです。

下関・長門鯨文化交流事業推進協議会



下関・長門くじら物語り

下　関

江戸時代からくじらの流通基地

アワビオコシ

下関でのくじらとの関わりは、太古からありました。鯨骨の化石の出土をはじめ、弥生時代に鯨骨で作ったアワビオコシ（考古博物館蔵）で知ることができます。

帆船でにぎわう下関港

本格的な関わりがみられるようになるのは、海上交易が盛んになった江戸時代からです。問屋を中心とする商業が盛んであったことから、くじらを捕獲するのではなく、捕鯨をする鯨組に資金の提供・資財の補給、そして流通と消費地としての機能を果たしていました。

長門で捕鯨が盛んであったころ、下関の商人が資金を提供したり、北前船で鯨油、肥料になる鯨骨や皮を、北国への積み荷として扱っています。幕末に高杉晋作の創設した奇兵隊を物心両面から支援した、白石正一郎も薩摩（鹿児島）へ、鯨骨の販売をしていました。

明治時代には加工・販売の基地

旧秋田商会

明治時代末、捕鯨砲による近代捕鯨が始まり、長門で、岡十郎・山田桃作によって日本遠洋漁業株式会社が創設され、下関に出張所が置かれました。これによって、長門・下関は、近代捕鯨発祥の地となりました。のち、下関で創業した西宗商店は、大阪まで進出し、くじらに関する商品の一手販売を行い、関西海産物問屋のなかで有名になりました。秋田商会も、中国大陸への交易で、くじらを扱っていたことがわかっているなど、下関が鯨製品の加工・販売の基地となりました。

岡　十郎

山田桃作

昭和のはじめ、南氷洋捕鯨へ

日本が南氷洋へ進出し、捕鯨を始めたのは、国司浩助（日和山公園に胸像）が昭和９年（１９３４）に日本捕鯨株式会社を創立したことによるものです。

続いて、中部幾次郎が下関で大洋捕鯨を創立したのが昭和11年（１９３６）のことで、南氷洋捕鯨が盛んになりました。以来、下関が南氷洋捕鯨の基地、大洋漁業株式会社の発足の地として、全国に知られることになりました。太平洋戦争が激しくなると、南氷洋捕鯨の船は軍事用に使われることになり、捕鯨は一時、中断となりました。

くじらのまち・下関へ

林兼産業と親子クジラのネオンサイン
（現在ネオンサインはありません）

戦争が終わると、食糧不足と、動物性蛋白質の確保が急務となりました。この両面を解決する方策として、昭和21年（１９４６）に捕鯨が再開され、その第一船は、下関の唐戸港から小笠原へ向けて出港しています。そして、次の年から本格的な南氷洋捕鯨が再開され、下関は、くじらによって戦後復興を遂げたといえるほどの、繁栄をもたらしました。

大洋漁業は、プロ野球の球団「大洋ホエールズ」（現在の横浜ベイスターズの前身）を組織し、女性吹奏楽団・ペンギンシスターズ（全国コンクール優勝）などを擁し、下関の最大の祭り、「みなと祭り」には、大きなくじらの山車が、市中を練り歩き、漁港節という歌の歌詞には、「札束積んで…」と歌い込まれ、くじら料理専門のレストランも営業するなど、くじらのまち・下関という名称さえありました。これは、昭和30年代から40年代にかけて、下関に水揚げされた鯨肉が、最高で２万トンにも達していたこと、捕鯨船の造船など水産関連産業が隆盛していたことに、裏付けられたものです。

「みなと祭り」のクジラの山車

しかし、南氷洋では、捕鯨オリンピックと称し、世界の国々がくじらを競って捕獲したため、生息数は激減。昭和62年（１９８７）、ついに商業捕鯨一時休止という事態を迎えることになりました。

商業捕鯨の再開を目指して

平成10年（１９９８）、下関港から南氷洋へ向けて「南極海鯨類捕獲調査船団」が出港しました。この船団は、商業捕鯨一時休止以降、南極海での鯨類の資源量等を調査するものです。平成19年（2007）には連続10回目の下関港出港を数えています。

平成13年（2001）には、市立しものせき水族館「海響館」が開館し、国内で唯一のシロナガスクジラの骨格標本が展示され、全国の注目を集めました。このような活動が背景となって、平成14年（2002）、第54回国際捕鯨委員会年次下関会議が開催され、世界各国から捕鯨関係者が集まったことは、下関とくじらの関わりを世界に発信する機会となりました。

鯨捕獲絵図（部分・八坂神社蔵）

長門

伝統古式捕鯨の地

稲荷大明神から川尻を望む

川尻漁港

長門での鯨獲りの歴史は全国的にも早い時期で、寛文12年（１６７２）、最初に瀬戸崎（現仙崎）浦の「鯨突き組」が長州藩に取り立てられ、翌年には「通鯨組」が、以後長州藩の直属の鯨組ができ、「殿様組」とも呼ばれていました。

秋から冬にかけて、日本海を南下し、温かい南の海で出産・子育てをする鯨は、長門のあたりを通過します。この時が、鯨の漁期です。捕鯨を行った地域は、北浦沿岸の、川尻・立石・津黄・黄波戸・瀬戸崎・通・三隅でした。川尻地域一箇所で、捕鯨を始めた元禄11年（１６９８）から、終末の明治43年（１９１０）まで、約２００年間に２８００余頭を捕獲したことが、「鯨鱗之霊」という碑の裏面に記されているところから、その規模を推察することができます。

捕鯨オブジェ（くじら資料館）

これほどの鯨を捕獲するには、工夫もされています。その一つは、通の正福庵に伝わる伝承に、薬師如来の「網は苧(麻)網にするがよい」というお告げがあったことから、漁法転換の努力もうかがうことができます。

しかしながら明治年代の後期になり、銃殺捕鯨が始まり、対馬海峡など沖合いで展開されるようになると、鯨の頭数が激減し、沿岸へ寄ってくる鯨も少なくなり、明治43年（１９１０）の捕獲が最後となりました。

人々に繁栄をもたらし、犠牲となった鯨は、厚い信仰の対象ともなりました。それは、母鯨の体内から出てきた胎児の姿が哀れみをさそったからです。

胎児を弔い敬う

清月庵

鯨位牌

通では捕らえられた鯨の中には、お腹に胎児を擁したのもいました。南の海で出産を控えての南下だからです。その姿を見た漁民は、鯨を供養せずにはおれませんでした。

延宝７年（１６７９）には、向岸寺の讃誉上人によって清月庵（観音堂）が建てられ、捕まった鯨を弔うことが始まっています。元禄５年（１６９２）には、鯨墓を建立し、鯨墓の後には、胎児を埋葬しました。また、捕らえた鯨の一頭一頭に、戒名をつけ、鯨鯢過去帖に記しています。

鯨鯢過去帖（向岸寺所蔵）は、元禄５年（１６９２）から書き続けられました。命日や戒名のほかに、捕獲年月・鯨種・捕獲場所・体長・捕獲鯨組が記され、「命の大切さ」を今の世に伝えています。また、向岸寺境内の歴代住職霊廟内には、鯨や魚類の御霊を弔う「鯨鯢魚鱗群霊地蔵尊」があり、江戸末期に鯨が一頭も来なくなった時、お地蔵さんに託した、通鯨組網頭早川源治右エ門の熱い想いが込められています。

近代捕鯨の発祥へ

長門は、「長州・北浦捕鯨」として、4大古式伝統捕鯨地の一つとして知られていました。しかし、明治時代末になると、日本の捕鯨は、外国の進んだ捕鯨技術に影響を受け、近代化への対応を迫られます。この時期に登場するのが、岡十郎と山田桃作です。

岡十郎は、阿武町奈古の出身で、明治32年（1899）にノルウエーに渡り、捕鯨砲を使った近代捕鯨術を学び、長門市三隅出身の山田桃作と日本遠洋漁業株式会社を設立しました。この会社は、本社は仙崎に置き、出張所を下関に開設。日本の近代捕鯨の開始です。こうしたことから、岡十郎と山田桃作は、日本の近代捕鯨の父、と称されています。

伝統文化を伝承

鯨唄を歌う子どもたち

長門での古式伝統捕鯨は、姿を消してすでに１００年を数えますが、通の向岸寺では、現在もなお、鯨回向の法要が毎年営まれています。それは繁栄をもたらせてくれたことに対する感謝であり、弔いの心の現われでもあります。

平成４年（1992）、鯨墓建立３００年を記念し、湾内に複製の鯨を浮かべ「通くじら祭り」が開催され、以後、年中行事となっています。この祭りでは「鯨唄」が歌われています。鯨唄は労働歌であり、また祝い歌でもありました。しかし、太鼓のほかに鳴り物や手拍子を打つこともなく、合掌のかたちのもみ手で、哀れみ、祈るかのように歌われます。

地元の小・中学校では子どもたちに受け継がれているほか、保存会を組織し、鯨への哀れみと畏敬の念が、今なお次代へと引き継がれています。

山陰観光列車『みすゞ潮彩』で行く

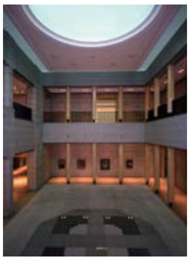
下関・長門観光めぐり

　下関と長門はともに本州の最西端に位置し、北長門海岸国定公園・瀬戸内海国立公園の指定地であり、風光明媚な地です。長門は伝統捕鯨、下関は近代捕鯨で栄えましたが、両地は、多くの人の由縁でも結ばれています。金子みすゞがその一人です。こうしたことから、平成19年7月（2007）、新下関駅・仙崎駅間に山陰観光列車「みすゞ潮彩」を走らせ、好評を博しています。

「みすゞ潮彩」

下　関　市

　下関は火の山からのながめが最高です。関門海峡、巌流島、満珠・干珠島など歴史の回廊を眼下に展望することができます。


下関市立美術館・光庭

火の山から関門海峡を望む

　文学の面では、金子みすゞが20歳から512編の童謡詩を作った地で、その足跡の地をめぐることもできます。また、田上菊舎、林芙美子の生誕地でもあります。芸術文化の分野では、近代日本画の父・狩野芳崖の作品を所蔵する下関市立美術館、長府博物館、また人類学ミュージアム、ホタル博物館、藤原義江記念館など多彩な施設が整っています。

金子みすゞ詩碑

林芙美子生誕地の碑

　神社仏閣では、国宝建築物の住吉神社・功山寺、安徳天皇を祭る赤間神宮、忌宮神社、妙青寺（豊浦町）などがあります。幕末、奇兵隊を創設し、明治維新の実現に活躍した高杉晋作の眠る東行庵も見逃せません。

高杉晋作陶像（吉田・東行庵）

　名産では、なんといってもふく・うに・くじら、最近ではアンコウやいかも加わって好評です。

川棚温泉

くじら料理

　人々の心身をいやしてくれるのが温泉ですが、川棚温泉・一ノ俣温泉・大河内温泉・湯谷温泉など多彩で、多くの人に親しまれています。

長　門　市

　長門の自然は、なんといっても、海上アルプス「青海島」で、観光船でめぐることができます。

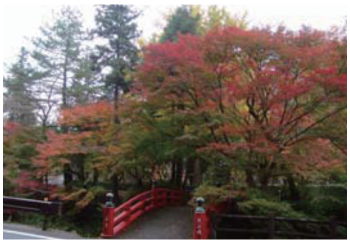
クジラの格好をした青海島観光船

金子みすゞ記念館

　文学の面では、金子みすゞが明治36年（1903）に生まれ、20歳まで過ごした地であることから、平成15年（2003）に「金子みすゞ記念館」が開設され、作品とともに、生涯をたどることができます。付近は“みすゞ通り”と称し、当時の面影を偲ばせる町になっています。　芸術文化の面では、全国からファンの訪れる香月泰男美術館、近松門左衛門の由縁から開設された劇場・ルネッサながとなどの施設があります。この他、日本一小さいくじら資料館も人気です。

香月泰男美術館

　神社仏閣では、大内時代の最後をとげた大内義隆の墓が大寧寺にあり、楽桟敷で知られる赤崎神社があります。また、幕末、萩藩士として財政を支えた村田清風の記念館も話題のスポットです。


大寧寺

　名産では、かまぼこに加え、平成20年（2008）には、23.42mのやきとりが、「全国やきとり連絡協議会」で世界一最長と認定されました。

仙崎かまぼこ

　温泉は、全国に知られる湯本温泉や俵山温泉、さらには湯免温泉・黄波戸温泉・油谷湾温泉などがあり、湯処としても知られています。

湯本温泉

人気のくじら鍋

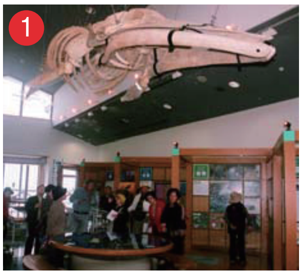
青海島観光船乗船場
親子鯨のオブジェ

下関・長門 捕鯨史探訪マップ

下関・長門には
往時の繁栄を偲ばせる
捕鯨に関する史跡が
数多くあります。
この捕鯨史探訪マップを
片手に、さぁ
ふるさと・新発見の旅に
出かけてみませんか。

しものせき

古くは縄文時代から、今を未来へつなぐ近代捕鯨発祥の地、下関。



1

ツノシマクジラ骨格標本

2000年、角島大橋が開通し、本土とつながった角島に、つのしま自然館が2003年に開館。90年ぶりに新種のツノシマクジラと命名されたくじらの骨格標本が展示されています。骨格の長さは、約11.5メートルです。　TEL 083-786-0430

2

捕鯨砲

キャッチャーボート（捕鯨船）の船首に取りつけられ、くじらを捕獲するときに発射されます。日本では1899年から使われました。この砲は、その後改良されたもので、吉見の水産大学校の構内に展示されています。

3

下関市立考古博物館

くじらは、縄文時代の遺跡から骨が出てくるなど、太古から食べられていました。
骨は加工し、道具として使っていました。市立考古博物館には、鯨骨製のアワビオコシが所蔵されています。
TEL 083-254-3061

4

捕鯨船：第二十五利丸

2002年、共同船舶（株）から譲り受けた捕鯨船です。南氷洋や北太平洋へ40年間に渡って出漁し、活躍したのち引退したものです。
2007年からは、展示場として下関漁港（水門側）に係留、展示していましたが、老朽化により2014年に解体され、2015年から、あるかぽーと地区のアンカー広場に捕鯨砲等の部品を、モニュメントとして設置しています。
TEL 083-227-4728

5

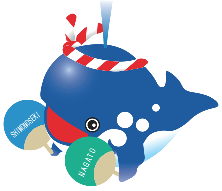
大洋漁業（株）本社跡地記念碑

大洋漁業の創業者中部幾次郎が1936年にその前身として建設した林兼商店の本社跡です。1949年まで大洋漁業本社として使用され、南氷洋捕鯨、トロール等多くの事業の本拠地となりました。

6

国司浩助胸像

日和山公園の西端にあります。
国司浩助は、トロール漁業のほか、船内急速冷凍装置を開発し、船内加工による母船式の南氷洋捕鯨を可能にしました。
日本水産（株）の創業者の一人でもあります。



7

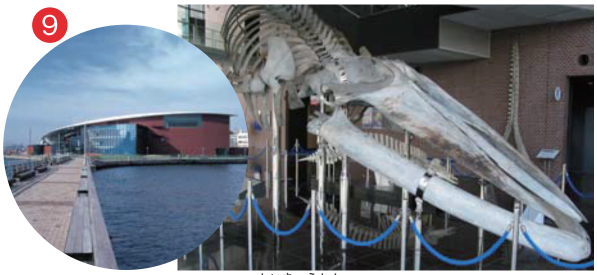
岡十郎・山田桃作顕彰碑

岡十郎は、1899年にノルウェーに渡り、捕鯨砲を使った近代捕鯨の技術を導入。山田桃作と日本遠洋漁業（株）を設立し、本社を長門市、出張所を下関市に開設。122トンの鉄製捕鯨船・長周丸を建造し、捕鯨に取り組みました。
山田桃作は、岡十郎と親戚で、日本遠洋漁業（株）の設立に尽力したほか、大阪でくじら加工品販売商社の設立などに貢献しています。
共に近代捕鯨の祖とされ、日和山公園には、1937年に建立された顕彰碑があります。

8

旧日本捕鯨別館

大正15年に建設され、日本で初めて南氷洋に捕鯨船団を派遣した日本捕鯨（株）の建物です。
日本捕鯨（株）は後に日本水産（株）の前身となりました。



9

市立しものせき水族館「海響館」

TEL 083-228-1100

2001年に開館しました。建物の外観は、大型くじらをイメージしたもので、関門海峡の新しいランドマークとなっています。館内には、シロナガスクジラの骨格標本が展示されています。この標本は、日本で唯一のシロナガスクジラの骨格で、ノルウエーのトロムソ大学博物館から借用したものです。長さは26メートル、生息時の体重は106トンと推定されています。

10

クジラ感謝碑

縄文時代からくじらの恩恵をうけてきた私たちは、鎮魂と感謝の念を表わすべきだと、「下関くじら食文化を守る会」が、2002年、“くじらさん　ありがとう”というクジラ感謝碑を、海響館横に建立したものです。

11

安徳天皇縁起絵図

赤間神宮が所蔵する「安徳天皇縁起絵図」にイルカが描かれています。源氏と平家が合戦のとき、勝敗を占ったものです。
占いの結果は、平家の軍船の下をイルカが通り抜け、平家が負けてしまいました。

12

クジラ館

長府外浦町、元下関水族館に隣接して、1958年に開設されました。くじらの小博物館として使われ、館内には、くじらを原材料にした食品など各種の製品が展示されていました。現在は閉館中です。

ながと

海に生き、鯨によって生かされた伝統が、いまも静かに受け継がれている里、長門。

1

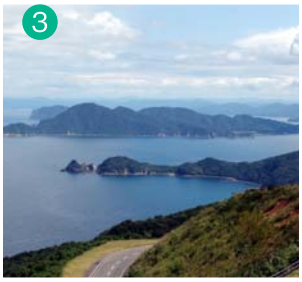
鯨鱗之霊の碑（げいりんのれいのひ）

川尻（かわじり）漁港を西へ進むと、最奥に「鯨鱗之霊」と刻まれた碑が建っています。1698年から捕鯨を始め、鯨の鼻骨の一部を埋葬していたそうで、毎年春、諸漁追弔のための大法要を厳修。碑は、1961年に建立されています。

2

津黄・立石浦（つおう・たていしうら）

津黄と立石浦は隣り合った浦で、1699年、共同で鯨組を組織し、捕鯨を始めています。
立石浦には、大岩の上に観音菩薩、津黄浦には稲荷社が祭られ、漁民の守り神となっています。



3

黄波戸浦（きわどうら）

津黄浦の東に続く、黄波戸浦では、1690年から捕鯨が行われ、1716年から約50年間は、萩の御用商人：熊谷五右衛門が出資経営をするなど、地元以外の者が、鯨組を運営する時期もありました。

4

日本遠洋漁業(株)発祥の地

1899年、岡十郎と山田桃作によって、近代捕鯨が始まると、最初の会社：日本遠洋漁業(株)が、この地に本社を、下関に出張所を置きました。
のちの変遷を経て日本水産(株)へ進展しました。

5

くじら資料館 TEL 0837-28-0756

1993年に開設されています。
「長門の捕鯨用具」（国重要民俗文化財指定）140点などを所蔵し、2階に展示されています。
北浦捕鯨の歴史を学ぶとともに、通浦（かよいうら）の先人が鯨と関わった温かい心情を感じ取ることができます。

6

鯨墓

1692年、清月庵（せいげつあん）（向岸寺所領）の境内に造られ、70数頭の鯨の胎児（たいじ）が眠っています。通浦（かよいうら）の漁民が、母鯨を解体したときに出た胎児を、手厚く葬ったものです。全国でも珍しく、昭和10年に国の史跡に指定されています。

7

鯨の位牌と鯨鯢過去帖（けいげいかこちょう）

向岸寺（こうがんじ）に所蔵されています。1679年、向岸寺五世讃誉上人（さんよしょうにん）が隠居し、通向町に観音堂を建立して、鯨の回向（えこう）を執行しました。1692年、鯨墓・鯨の位牌（いはい）・鯨鯢過去帖が作成されました。
鯨鯢過去帖には、親鯨には浄土宗の「五重相伝」で修行した人に与えられる「誉」の誉号（よごう）が四文字の二字目に記され、手厚く葬られたこと を物語っています。
過去帳は4冊ありましたが、土砂崩れの際に1冊なくなりました。内容は、命日・戒名（かいみょう）・鯨種・捕獲場所・体長・捕獲鯨組が記され、貴重な命の大切さを伝えています。世界でここしかありません。

8

鯨回向・鯨法会（くじらえこう・くじらほうえ）

仙崎・通では今でも行われています。通浦（かよいうら）の向岸寺では、浦の行事として回向が実施されたのは1784年のことで、以来連綿と続けられています。保存会によって、鯨唄も奉唱されます。

9

鯨鯢魚鱗群霊地蔵尊（けいげいぎょりんぐんれいじぞうそん）

1863年、通鯨組の網頭・早川源治右エ門が、鯨や魚類の御霊を弔うために、向岸寺境内に建立。台座に「鯨鯢魚鱗群霊」と刻みました。江戸末期、西洋列国の乱獲で、鯨が一頭も来なくなり、祈るような気持ちが伝わってきます。

10

正福庵（しょうふくあん）

向岸寺の境外仏堂（薬師堂）です。鯨組と関わりが深く、お薬師さんのお告げにより苧（お）(麻)で編んだ網を使うと豊漁になり、また、刃刺（はざし）しが、鯨漁を始める前にはこの寺にこもり、「満願成就の朝」、井戸水で身を清めたということです。さらに、裏山の竹は薬師竹といい、この竹を鯨組の幟旗（のぼりばた）などに使っていました。
境内は、通（かよい）小学校発祥の地、境内下は、金子みすゞの父親の生家跡でもあります。

11

早川家住宅

中世からの古い家柄で、庄屋をつとめ、鯨組では網頭として活躍。18世紀後半に建設された建物で、土蔵造り一部2階建て、漁家の遺構をよく留めていることから、重要文化財に指定されています。

12

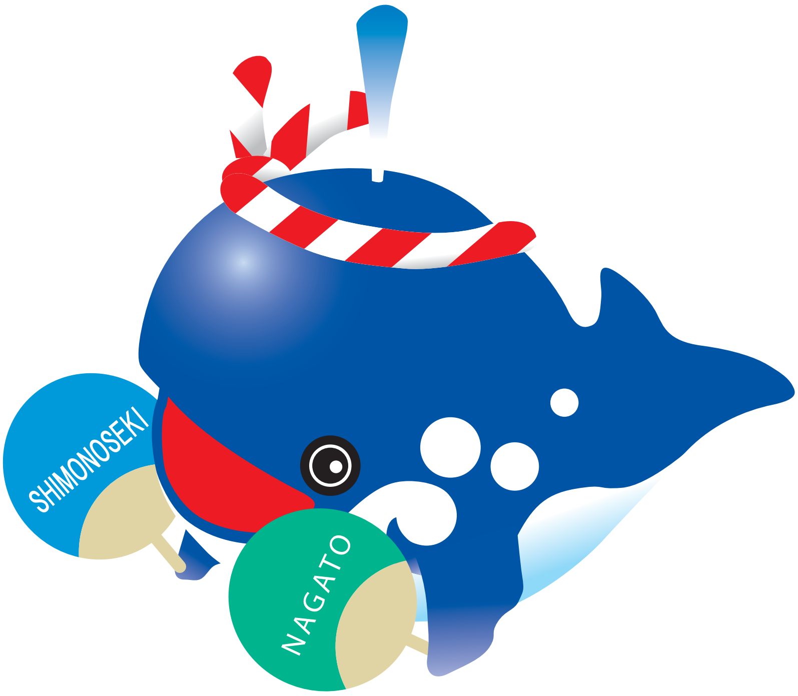
通くじら祭り

1992年、通浦（かよいうら）では鯨墓建立300年を記念して、「通くじら祭り」が開催され、古式捕鯨が再現されました。以来、毎年7月21日に、湾内に複製の鯨を浮かべ盛大に行われています。

13

お寺の山号に「鯨」

江戸時代には三隅地区も捕鯨をしていましたが、仙崎・通と競合するため長州藩の命令で中止になりました。「鯨山西福寺（くじらさんさいふくじ）」もあり、日本近代捕鯨の「日本遠洋漁業（株）」の設立総会が、三隅の滝口楼で開催されました。



下関・長門くじらマップ

お問い合わせは

下関・長門鯨文化交流事業推進協議会

下関／下関市産業経済部水産課　（〒７５０-０００９）下関市上田中町一丁目16番3号

TEL（083）231-1273・FAX（083）233-1399

長門／長門市経済観光部商工水産課　（〒７５９-４１９２）長門市東深川1339番地2

TEL（0837）23-1145・FAX（0837）23-1146

●主な参考資料／「下関市史」、「長門市史」、「長州・北浦捕鯨のあらまし」、「下関クジラ物語」